

晩年の漱石

『こゝろ』(その一)

— 身体 の 発 見 —

加 藤 豊 子

(一)

△「あなたは本当に真面目なですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。あなたは疑るには余りに單純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。あなたは腹の底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です」

私の声は頷へた。▽

(「こゝろ」上・三十一)

『こゝろ』を論じる際、しばしば引用される箇所なのだが、「先生」と「私」との間で交わされた言葉の率直さと熱っぽさ、そしてその間に見え隠れする「先生」の凍てつくような沈鬱と憂愁に閉ざされた晦渋、それらの混在・併置による両者の共鳴効果、こうしたものが読者を引きつけてやまぬ『こゝろ』という作品の魅力となつてゐることはまちがいない。^(註1)「先生」の周辺にただよう、他を引きよせずにはやまない清浄な透明感や恩寵ともいふべき温かみと、一方で「先生」がもつてゐる暗く、近よりがたい障害感^(註2)は、語り手「私」を「先生」に引きよせ、人物語り▽を推進してゆく力となつてゐる。

△要するに先生は私にとつて薄暗かつた。私は是非とも其所を通り越して、明るい所迄行かなければ気が済まなかつた。先生と關係の絶えるのは私にとつて大いなる苦痛であつた。▽

(中・八)

△私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居られないといふ感じが、何処かに強く働らいた。斯ういふ感じを先生に対して有つてゐたものは、多くの人のうちで或は私だけでも知れない。然し其私丈には此直感が後になつて事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと云はれても、馬鹿氣てゐると笑はれても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。▽

(上・六)

「私」の「先生」にひきよせられる力が「薄暗」さから「明るい所」へむかう「私」の志向性のなかで発現されてゐること、またそれが「直感」や「直覚」であつたことの積極的意味については後に改めてふれるつもりだが、ここではそうした「私」のひきよせられる力が「私だけ」という、選ばれてゐることの特権意識によつて増幅されてゆくことに注目しよう。「先生」の「不思議」、すなわち「私」と「先生」との間にある障害を讀み解き明かす、そのことによつてその障害を突き破る機能を担う「私」は、読者の〃謎解き〃の期待を担う、「内包された読者」(W・イーザー『行

為としての読書」といえよう。そして、「あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。」といわれることによって「先生」の告白（メッセージ）は読者にとって最も親密な伝達の様相をおびてくるのである。けれども、この冒頭に引用した箇所が私達読者にいいがたい衝迫力をもつのはほかに理由があるように思われる。

先にも述べたとおり、ここにみられる「先生」と「私」との会話が読者をひきつけてやまぬ力をもつとしたら、それはたんに「先生」が「私」に語った「死ぬ前にたつた一人の他を信用して死にたい」というようなことばや、二人の間で何回か行きかった「真面目」という語の意味する内容によるだけではないだろう。それを最もよく読者に伝えているのは、たとえば「私の声は顫へた。」（傍点引用者）という地の文にみられる身体的な表現ではないだろうか。こうした表現は地の文だけでなく、「もし私の命が真面目なものなら、私の今といった事も真面目です」（同上）という会話の中にもみられる。これは「あなたは腹の底から真面目ですか」（同上）という「先生」の問いかけに対する「私」の身体的表現、つまり身体的応答であろう。ここで漱石はこと（「事」）についてのべているだけではなく、ものでもありことでもあるような人身体についてべているのである。引用の少し前には次のようにある。

△「私は何にも隠してやしません」

「隠してゐらつしやいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいふものと、私の過去とをごちゃ／＼に考へてゐるんぢやありませんか。私は貧弱な思想家ですが、自分の頭で纏め上げた考を無暗に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなるとそれは又別問題になります。」

「別問題とは思はれません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆んど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれてゐない人形を与へられた丈で、満足は出来ないのです。」

先生はあきれたと云つた風に、私の顔を見た。巻煙草を持つてゐた其手が少し顫へた。（中略）

「私の過去を許してもですか」

許くといふ言葉が、突然恐ろしい響を以て、私の耳を打つた。私は今私の前に坐つてゐるのが、一人の罪人であつて、不憚から尊敬してゐる先生でないやうな気がした。先生の顔は蒼かつた。▽（上・三十一）

巻煙草を持つ「先生」の「手」の「顫へ」と、先に指摘した「私」の「声」の「顫へ」とは明らかに呼応している。顫える「先生」の「手」は「先生」によつてまなざされた「私」がまなざし返してとらえた「先生」の人身体Vの表情に他ならない。つまりここにみられる「先生」と「私」との会話はまなざし、まなざし返された二人の視線の間で交わされたことであつたわけなのだが、それらの言葉は受け手に何がしかの身体的動作を呼びおこす力をもつことにおいて行為をまねく言葉として表出されているのである。

そうした言葉のひとつが「私」の「耳」を「打」つ。「打」たれた「私」がまなざしかへした「先生」の顔は「私」にとつて「一人の罪人」と映つた。こうして互いのまなざしの行き交ひの中で発せられた身体的表現——身体でありかつ言葉であるもの——は「先生」の心の障害の唯中に急速にくだり、それを開示する力（もの）として存在している。

「私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。」という「先生」の呼びかけは「私」にとつて一人の蒼ざめた「罪人」の全身から発せられた懇願に他ならなかつた。だからこそ「もし私の命が真面目なものなら、私の今といった事も真面目です」という「私」の応答が顫える「声」で発せられたのであり、「私」による「先生」のこの「過去」の全身的な受容があつたからこそ、「話しませう。私の過去を残らず、あなたに話してあげませう。」という「先生」の応答、すなわち告白——語りV——の受諾があつたのである。

ここでふたたび「先生」の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆んど価値のないものになり

ます。……」という「私」の応答を思いおこしてみよう。「無遠慮な私」の「大胆」な応答を通して、ここで「先生」の「過去」と「思想」、そして「私」の「命」が合体しようとしているのである。それは「先生」の「貧弱な思想」が「私」の「命」によって賦活され、再生するためにほかならない。この応答的対話によってそうした賦活と再生が約束されたからこそ、「先生」の「過去」と「貧弱な思想」——その核心はいうまでもなく「K」と共有したエロスと「明治の精神」の悲劇である——は「先生」じしんの血と肉による贖いの行為によって揚棄されていくのである。

△……私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。▽

(下・五十六)

と「先生」が語っていることから、「先生」に「過去」と呼ばれたものが「先生」の「経験」を意味するものであることがわかるのだが、「過去」すなわち「経験」と「思想」という二つのことが「私」の新鮮な「命」すなわちものに受肉されてはじめて活きた歴史の構造体としての「身体」として再生する、そのことが、今、ここで、「私」と「先生」との応答的対話(ダイアログ)を通して実現されようとしているといえよう。この受肉が志向されたからこそ、先にのべたように「先生」によって生きられた「経験」の貧しさと、それ故の悲劇は「先生」の肉体の死によって贖われ、かわって『こゝろ』前半(上、中)の「私」の「身体」として再生したのである。いうまでもなく、「私」の「命」によって語られた「身体」は「先生」の「貧弱な思想」を超出した水準にあるはずだ。『こゝろ』冒頭の「私」の「身体」は何よりもそれをよく物語っている。

△ 私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもただ先生と書くで本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。(中略)余所々しい頭文字杯はとも使ふ氣にならない。▽ (傍点引用者)

(上・一)

「私」によってこのように語られる「先生」と「私」との関係は、『こゝろ』(下)で「先生」が語った「先生」と「K」との関係を超え出ている。「貧弱な思想家」としての「先生」とは、「命」と合致することなく、また自己とは異質な、「過去」の「知」の所有者「K」へと開かれることなかった、若き日の「先生」の精神／身体のことであり、「K」の死後なおモノローグ的思考(「自分の頭で纏め上げた考」)のうちに閉ざされ、一方、自己の「過去」の「経験」と「思想」とを合致させることなく過ぎてきた、「私」との邂逅以前の「先生」の精神／身体のことであるが、それはとりもなおさず『こゝろ』執筆以前の作家漱石の思想的水準、表現の水準ともいうべきものであった。『こゝろ』とこれに続いて執筆された『道草』において漱石は彼じしんの過去の思想的、文学的水準を問題とし、これを超克しようとしている。引用した「先生と私」三十一のこの場面は、その超出が「先生」のモノローグ的思考によるのではなく、「私」とのダイアログによってはじめて可能であることを示している。

「先生」は「K」の死後、「私」と出会うまで、より厳密にいえば「私」とのこの応答的対話をおこなう今この時まで、孤立のうちに身を竦ませたまま、「過去」の記憶ともいうべきその閉ざされた思念の風化に身を晒しつつあった。物語りの冒頭、「先生」と「私」が共に生きた時間の始まりを思いおこしてみよう。

△……二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返つて私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いてゐるものは、其近所に私等二人より外になかった。さうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしてゐた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生は又ばかりと手足の運動を已めて仰向になつた儘浪の上に寝た。私も其真似をした。(中略)しばらくして海の中で起き上がる様に姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と云つて私を促がした。▽ (「こゝろ」 上・三)

この場面がのちに「先生と遺書」で語られる、「先生」と「K」との房

総の旅、そこでの海水浴の場面と呼応するものであることはいうまでもない。しかし、かつて「K」と試みた海水浴では、海岸の条件やそこに来てなお「書物をひろげ」なければならぬような「先生」の心の状態によって、二人は海で充分に身体をのぼして泳ぐことも、「筋肉を動かして海の中で躍り狂う」こともできなかったことを想い出そう。これに対して、この場面ばかりでなく、『こゝろ』(上)において、「先生」が「私」に心を開いている状態、また単刀直入に人生の「事実」を語る場面で(たとえば、二十六、二十九、三十二)、「先生」は必ず「自然」の中に入ってゆくかその近くへ身を寄せ、「起きるとも寝るとも片付かない」姿勢をとって「私」に語りかけている。^(注4)

漱石の作品における「仰臥の姿勢」をはやくにとりあげたのは蓮實重彦であった。^(注5)氏は「横たわる姿勢」を、「漱石の小説にあつては、何らかの意味で言葉の発生と深くかかわりあつた身振りである」とし、引用の場面について、△「先生」は、無言のうちに、横たわる術を青年に教えているのである。(中略)ここでの「先生」の沈黙は、とりあえずのものにすぎず、青年が横たわるこの意味を体得しうるかどうかその沈黙においてためているV(傍点引用者)とのべ、△言葉が、それにふさわしく組織されるには、それなりの契機が必要なのだ。「先生」は無言の仕草によってそう語りかけているV(同上)とのべている。しかし残念ながらそこで氏は「横たわるこの意味」、「言葉の発生」や組織化の「契機」についてほとんど説くところがない。問題は、その「身振り」の意味であり、氏の言葉を借りれば「漱石の主題」をになう主人公から発せられる言葉にその「身振り」がどのような意味を付与しているかなのである。「先生」は「仰臥の姿勢」で「無言」のまま「私」に「横たわるこの意味」を教えているのではない。その姿勢が明瞭なひとつの言葉／意味なのである。さらにいえば、漱石の様々な主人公にみられるその姿勢が一樣に同じ意味をもっているわけでもない。このような姿勢で人生における△恋愛△、△金銭△、△生死△のクリシスを「先生」のような「語り口」で語った「漱石の主題」をになう主人公は、漱石の小説のなかでいまだかつて登場したことはなかった。「先生」のこの△姿勢△は以前に登場した主人公たちのそ

れとは異なる、独自の意味をになわされているはずである。

話をもとにもどそう。「自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂う」△私△と対照的に、「先生」は「手足の運動を已めて仰向けになつた儘浪の上に寝」ている。^(注6)このような「先生」の、動きを止め、仰臥する身体こそ「K」の死後「先生」が徐々に追いやられた精神の射影であり、かつ身体状況にはかならない。それは「緊張を要しない安定した姿勢」(市川浩)である一方、「意識水準を低下させ、睡眠にさそひこむ」(同上)のような、意識とは対極にある「向性的構造」(同上)としての△身体△に最も近い「精神的姿勢」なのである。

「先生」は知識の喩ともいふべき「眼鏡」を落とし(上、三)、ステータスシンボルともいふべき「帽子」を「風」に吹き飛ばされ(上、二十六)、始めて「起きるとも寝るとも片付かない」(上、二十七)姿勢をとり、「仰向けになつたすま波の上に寝」ることができるようになつたはずである。今、海辺で「麦藁帽子」を被り、海に入る「先生」は、西洋人のように「護謄製の頭布」を被るのではなく、「砂の上に落ちた手拭」で無造作に「頭」を包み、直接、「頭」を海に浸して泳ぐ身になっている。

△其時の私は屈託がないといふより寧ろ無聊に苦しんでゐた。それで翌日も亦先生に会つた時刻を見計らつてわざ／＼掛茶屋迄出かけて見た。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽子を被つて遣つて来た。先生は眼鏡をとつて台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すた／＼浜を下りて行つた。先生が昨日の様に騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けたくなつた。私は(中略)相当の深さの所迄来て、其所から先生を目標に抜手を切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかつた。▽

(上・二)

「私」は「先生」に声をかけ、海中で「先生」を追いかける以前に、二度、「先生」が沖から岸へ戻ってくるところを見ている。一度目は西洋人と一緒に泳ぎ出して「一直線」に戻り、二度目は一人で泳ぎ出、「妙な方

向から」「一種の弧線を描いて」帰って来た「先生」である。この「先生」の泳ぎは何を意味しているのだろうか。

いわゆる後期三部作とよばれる漱石晩年の作品群のうち、『こゝろ』以前の『彼岸過迄』、『行人』においては、物語りの最後に主人公たちは旅へ出かけ、旅先の△自然△の中で浄化された至福の時間を生きているが、その時主人公の△語り△がおこなわれる場所は二作とも符合したように海辺であった。『行人』の一郎は宵闇のせまる海辺を、打ち寄せる波に足を濡らしてHさんとともに歩きながら、というよりはむしろ、歩行という行為をともなつたからこそ、Hさんにむかつて「お貞さんは君を女にしたやうなものだ」(『塵勞』、四十九)と語りかけ、「何うかして香殿かぐらになりたい」(『同上』五十)と言いはなつことができた。(しかし、この時一郎の言葉が、宵闇のためにHさんとまなざしを交わせなかつたために、モノローグに終わっていることに注意しよう。)『彼岸過迄』の須永が、海とその中でたわむれる人々を覗る者にすぎなかつたのに対して、一郎は波打ち際まで海に近づいてはいるものの、彼らは旅に出たまま、都市の日常的時間を生きている家族や親族に間接もしくは直接、手紙で、旅先で遭遇した、浄化された時間を語り伝えたにすぎなかつた。

須永や一郎があくまで「海」、つまり△自然△の中に出かけて行く者たちであつたのに対して、『こゝろ』の主人公たちは共に海の沖まで泳ぎ出、そこから岸、すなわち人間の生活が営まれる場所へと帰ってくる者たちである。「私は実に先生を此雑沓の間に見付出した」(上、一)とあるように、「私」と「先生」は、見知らぬ者同士が出会つてはすれ違つてゆく「雑沓」の中で、しかし決定的な、人と人との邂逅の時間を共有するのである。『こゝろ』前半(上、中)における「私」の△語り△が、「先生」を見かけた二日目の日に、「私」が「先生」を追いかけて見失い、「先生」を探しながら一人で沖から岸へ戻ってくる、「私」によって生きられた時間の喩である、ということがゆるされるとしたら、「私」が見た、西洋人と別れ、沖からひとり「妙な方向から」「弧線を描いて」岸へ戻つてきた「先生」の泳ぎは何の喩といえようか。わたしのこのテキスト解説の作業は、最後にこの問いに答えなければならないだろう。

話をもとに戻そう。「先生は始終静かであつた。落ち付いてゐた。」(上、六)とあるように、「先生」の心の状態、精神の姿勢を表わすものとして「落ち付き」、「静かさ」という語が使われ、これは前にのべたように、作品前半にひろがる透明な、清浄感と通いあうものであるが、それが「静過ぎて淋しい」(同上)と語られる時、それは「人間の中に取り残されたミイラ」(下、一)、生ける屍の「先生」を死へと追いつめる、「先生」の精神／身体の障害にほかならない。

△彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたやうなものです。(中略)其時の私は恐ろしさの塊りと云ひませうか、又は苦しさの塊りと云ひませうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のやうに頭から足の先までが急に固くなつたのです。(下・三十六)

△……私の眼は彼の室(や)の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失ひました。私は棒立に立竦みました。(下・四十八)(傍点引用者)

「先生」は「K」からお嬢さんへの恋を打ち明けられた時、さらに「K」の自決した姿を見た瞬間、身体の柔軟を失い、「立竦」んだ姿勢のまま、いわば「魂の吹き込まれていない人形」(上、三十一)ともいふべき存在になつてしまつたのである。

△……もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立つてゐたならば、私は屹度良心の命令に従つて、其場で彼に謝罪したらうと思ひます。然し奥には人がゐます。私の自然はすぐ其所で食ひ留められてしまつたのです。さうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。(下・四十六)

「K」に謝罪しようとして果たせなかつた「先生」にとつて、それはじしんの内なる△自然△が失われた結果と語られている。「貧弱な思想」とはこうした「先生」の身をとりまく精神の謂であつたが、こうした「先生」

の身体と精神の状況を突き破ったものこそ、若い「私」の「自由と歓喜に充ちた」(上、三)身体であり、顫える「声」で発した「私」の「真面目」で「大胆」な「命」／精神であった。

△……先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命の断片として、其墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取って其墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命の扉を開ける鍵にはならなかった。寧ろ二人の間に立つて、自由の往来を妨げる魔物のやうであつた。▽ (上・十五)

「生命」と「自由」に充ち、それらにむかつて「一図」に進んでゆく「私」を「先生」は「無遠慮」、「大胆」、「単純」(上、三十一)と評したが、「先生」との間に「生命の扉」を開け、「自由の往来」を求める「私」の言葉は、地方から都市へと△知△を求めてやって来た「私」の身にしてはじめて発したものでなかったろうか。

かつては「先生」もこうした地方出身の知的青年であった。孤絶と人間不信という現在の「先生」の精神と身体の閉塞状況は、「K」の自決の結果というばかりではなく、都市という形態の人間社会と、近代(明治)という時代の△知△共同主観のあり様がその機能のうちに生み出した人間の存在状況であろう。(注10)「私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身体を持て余した」、「私は式が済むとすぐ帰って裸体になつた」(上、三十二)と語られる「私」はそうした近代の△知△の閉塞性を受けつけない、開かれた身体／精神の持主として設定されている。

地方で幼なじみとして育った(下、十九)「先生」と「K」とが東京で遭遇した悲劇は、たんに一人の女性に引き寄せられる二つのエロスの争いと排斥という様相ばかりでなく、東京という都市が近代日本の△知△のトポスであるという理由で生じたものともいえよう。「K」の悲劇はこの国の「過去」の共同体のレミニッサンスに育まれた伝統的思想／精神が、近代日本の△知△の潮流と都市という新しい形態の人間社会のなかでその存在を主張して抗い、無惨なかたちでそれらに裏切られ、存在を扼殺されて

いく過程にはかならない。「K」の死後、「先生」が徐々にそこへと昇し込められた精神と身体状況こそ、この国の「過去」の共同体に育まれた「共同主観」、「明治の精神」の崩壊を代償に都市へと追放され、都市民となった近代日本人の身体と精神の極限状況ともいふべきものである。

『こゝろ』という物語りを推進させる重要な存在としてここで漱石が「田舎者」(上、二十八)の「私」を登場させていることは、この国の近代における農村の荒廃(上、二十八)や、知的青年とその家族、彼らをとりにまく農村共同体との背反(中、三、六、七)を一方で見すえながらなお、かれが両者の矛盾と分裂を超えるものとして、農村(周縁)から都市(中心)へという、身体と精神の代謝・交通を志向していたことを物語るのである。(注11)

では、いかにして「先生」はこのように閉塞し、枯渇した存在となるに至ったか、「K」と「先生」との悲劇とは何であつたか、次にみてゆきたい。

(注1) 神山陸美氏に、「『こゝろ』は、漱石の内に秘められた暗さが浄化され、おのずから滲み出たところに産み出された作品である。暗く、沈鬱な、しかもいまいがたい清浄な印象が、緻密な構成のもとに全篇を覆っている。」との評言がある。(『『こゝろ』論』『それから』から「明暗」へ)砂子屋書房・82、12 所収)本稿ではこの「暗さ」を「明るさ」(「浄化」)への志向性に焦点をあてて論じてゆくつもりである。

(注2) 「私」が若い「生命」の象徴として描かれていることには二つの意味が付与されているとおもわれる。一つは若い世代としての読者であり、これはさらにいえば「先生」の思想的水準——△語り△を批判的に継承しうる新しい知性の喩ともいえよう。いま一つは「先生」の「過去」の「思想」に欠如した「命」——身体——であり、「先生」の思想的水準を超出するうえで不可欠の構造体の喩である。

(注3) 相原和邦氏に、「一面において先生以前の知識人にすぎない『私』は、他面において『先生』以後の知識人としての重量を担っている」という指摘がある。(『漱石文学における実質の論理第一章『こゝろ』』『漱石文学そ

の表現と思想』 塙書房80・7所収) また、神山氏(前掲書)には「『私』はこの悲劇(引用者注)一人の女性をめぐる『先生』と『K』とのエロスの悲劇」を模倣する者であると同時に、決して真正の悲劇へは至りつかず、代わりにそれを解説する役割をになう者」であるとの見解があるが、みてきたように「私」の△語り√は「模倣」や「解説」以上のものを有している。

(注4) 同様の場面が、(上) 十三にある。ここでは「先生」は身を横たえることとはしていないが、歩行という行為(動作)を共にしながら「私」へ語りかけている。

(注5) 「横たわる漱石」『国文学』・74年11月号のち『夏目漱石論』青土社・78・10所収)

(注6) この時「私」はすぐに「先生」のそうした「姿勢」を「真似」ている。この場面やこの姿勢についての言及ではないが、(注3)の引用のように、神山陸美氏は「先生に対する『私』の関心が、先生に罪障意識を植えつけた心性をそのまま模倣してしまふ」と、重ねて「私」を「先生」のネガティブな「模倣」者と解している。しかしこの場面でも仰臥の姿勢をとった「私」が「大声」で「先生」に語りかけるなど、その差違があわせて語られ、また「私」の「先生」に対する「模倣」(同一化)の志向性はネガティブには語られていないことから、「私」の「先生」への同一化の志向を「先生」の「悲劇」や「罪障意識」にむすびつけて解することは当たらない。それよりはむしろ、たとえば(上) 十六〜二十に描かれている、「私」が「先生」から留守番役を依頼され、「奥さん」(静)と二人だけですごした時間のことをおもしろいとおすならば、——これは(下) 二十六に描かれている、「奥さん」と女中の留守中、「K」と「お嬢さん」が親しくしている様子を目撃した時から「K」に対する「先生」の疑惑、「お嬢さん」への嫉妬心が萌した出来事と対をなす出来事である——「先生」は「K」との間では到達できなかった、「エロスの恣意性」に耐えうる信頼関係を「私」に期待しているとも説めるわけで、「先生」の側からいえば「私」に求めているものは明らかに「模倣」以上のものである。

(注7) 市川浩『精神としての身体』第二章二「向性的構造」

(注8) 「K」と「先生」、「先生」と「私」は陰画・陽画、また「語られる対象」としての「図」と、「語り手」ないし「語り」としての「地」という一対の存在とみなしうる。これは前作『行人』で一郎についての語り手が二郎とHさんとに分裂したこと、換言すれば物語りの推進力としての「語り手」二郎の機能に限界があったことを考えるならば、『こゝろ』におけるこれらの登場人物たちは『彼岸過迄』、『行人』で試みられた△主人公―語り手√の関係を明らかに一歩前進させた形態といえよう。これまで本文で断片的に指摘したように、「先生」や「私」は単に「語り手」とどまらず、「先生」と「私」の△語り√の機能は『行人』の一郎に対する二郎、Hさんの関係とは質的に飛躍したものとなっているのである。

(注9) 『こゝろ』(下) 四十六で、「先生」が「K」を出しぬいて「奥さん」に「お嬢さん」との結婚の申し込みをした後、ひとりで「長い散歩」をする、その道のり(小石川↓神田↓本郷↓小石川)を「先生」が「いびつな円」と語っていることが思いおこされる。

(注10) 先に引用した(下) 四十六の「たった二人曠野のまん中に」という部分や、(下) 三十八、四十三で描かれた「室」の「仕切りのふすま」は、これらの象徴とも説める。

(注11) 相原和邦氏(前掲書)に、「先生の叔父の裏切りを、近代功利主義に毒された者によって共同体の一体感が内部から切り崩された現象と解釈すると、これ(引用者注)上、二十三で先生と私との結合が私と父との結合より強いと私が自覚すること」は、近代の合理主義によって血縁共同体が外部から冒されて行く現象とあり、さらに『私』の場合には、肉親からの離反を代償に、先生との間に、血肉に食い込むほどの精神的結合が全く新たに成立している」と説かれている。しかし「私」の△語り√の時間において、「私」は「両親」と精神的に「離反」してはいないのであって、次章で詳述するよう「私」と「先生」の△語り√や両者の関係において漱石は農村共同体や血縁共同体と「先生」と「私」との「結合」を単純に二項対立的なたちで併置しているわけではない。また、「私」と「先生」との「精神的結合」を「近代の合理主義」と解するのは誤まりである。その理由については次章以下で展開してゆく。

(二)

△私は叔父が私を欺むいたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違ないと思ひ詰めました。父があれ丈賞め抜いてゐた叔父ですら斯うだから、他のものはいふのが私の論理^{ロジック}でした。(中略)私は思案の結果、市に居る中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、凡て金の形に変へやうとしました。旧友は止した方が得だといつて忠告して呉れましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷を離れる決心を其時に起したのです。▽

(「こゝろ」下・九)

故郷喪失を代償とした都市東京での学生生活を通して、「先生」は知的青年、さらに書齋人へと変貌していく。それは「向ふの思ひ通りにならない」(同前)、「我が通つた事になる」という意味において、若き「先生」における自我の目覚めと、「他は頼りにならないといふ觀念」(下、十二)、つまり他人への猜疑、不信の誕生を物語る出来事だった。「先生」はこの時、「自由と独立と己れとに充ちた現代」、すなわち△明治△という時代を象徴する知的青年となつたのである。△近代以前の血縁共同体の崩壊と同時に始まるこの懷疑は近代的懷疑精神に通ずるものであり、そこに生じる「論理」は近代知識人の誕生を語っている△という相原和邦の指摘(前掲書)は、ある面ではうなづけるものである。しかしここで注目すべきことは、「先生」はじしんにおける「知識人の誕生」をメッセージの受信者「私」に語り伝えているのではなく、こうした「思案」や「觀念」、「論理」や知的関心を介した「K」との「学問の交際」(下、三十一)が、「先生」の身を「思ひも寄らない境遇に陥し入れた」(下、九)「事実」を語ることによって、それらの破産を打ち明けているのである。先の引用の前で、叔父に財産を横領されて気づかなかつた自分をふりかえつて、「先生」は次のように語っている。

△凡てを叔父任せにして平氣でいた私は、世間的に云へば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とでも云へませ

うか。私は(中略)正直過ぎた自分が口惜しくつて堪りません。然しまた何うかして、もう一度ああいふ生れたままの姿に立ち帰つて生きて見たいといふ心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知つてゐる私は塵に汚れた後の私です。▽

(下・九)

「先生」は、血族から疎外されたところに生じる「思案」や「論理」、つまり一般に合理主義と呼ばれる近代の△知△を身につける以前のじしんを「正直過ぎ」る「馬鹿」と呼ぶ一方、「生れたままの姿」の「純なる尊い男」とみなし、そうした「姿」、身に「立ち帰つて生きて見たい」とのベ^(生)ている。「先生」は前述したような近代的△知△をまとつたじしんを「塵に汚れた後の私」と語り、その△知△を「塵」とも「汚れ」とも呼んで、じしんの再生のためにそれを放擲しようとしているのである。先づいへば、後に「先生」がその名のもとに「殉死」することになる、「明治の精神」とは、「K」と「先生」によって生きられた△明治△というこの国の近代の△知△の状況のことであり、「先生」の△語り△の時間においては「私」という新たな時間に生きることを中心とした精神と身体^(生)によって再生をねがわれている、精神と身体としての知/共同主観のことであらう。

注目すべきことは「先生」が「過去」に生きた知/共同主観を否定しているにとどまらず、その裡に潜む「暗いもの」(下、一)を物語ることがとりもなおさず、「先生」の「過去」の精神/身体(△知△)を揚棄、再生した形態に他ならない、『こゝろ』(上、中)における「私」の△語り△へと連続しているということである。換言すれば『こゝろ』(下)における「先生」の△語り△は「先生」の極北の志向性であり、(上、中)の「私」の△語り△は「先生」の志向性が生きられた精神/身体^(生)なのである。そしてそれらは晩年の漱石の思想の水準と志向性を余すところなく物語っている。いまそのことを考えるに際して、のべてきたような志向性を軸に関連用語を分析し図表化してみたところ次のような結果が得られた。

(この項つづく)

志向性

△身体△

いのち(命)

たましい(魂)

△自然△系

自然

霊魂

運命

精神

身から体

体たい

肉体

生きている

(生きたもの)

(生きた答)

直接

直截に

超然と

△真相△

真相

天(天罰)

△真實△系

人格

真理 道(人道)

人間

真實

倫理

自由(自由意志)

真情

平凡な(説)

神聖

虚きよ

普通の(談話)

罪のない

單純

直截で簡単な(話)

潔癖

真面目

生れたままの(姿)

純白

(純なる尊い)

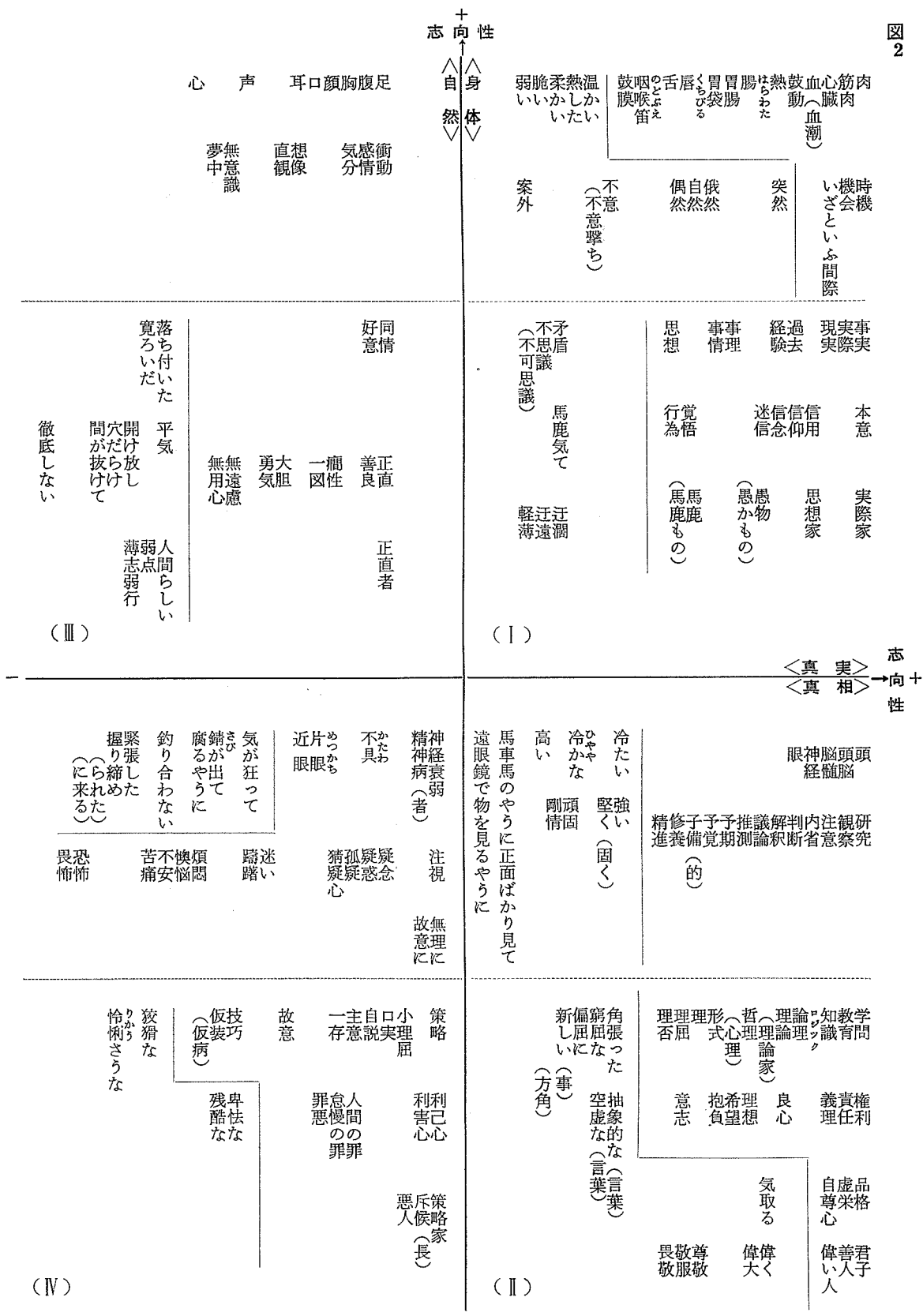
成人した(眼)

無邪気

公平に(見廻したら)

(淡白な子供らしい心)

圖
2



(注1) こうした志向性は『こゝろ』執筆時の大正三年に製作された次のような漢詩に表現されている。(「漱石詩集」全集第十二巻所収、読み下しは吉川幸次郎による。)(傍点引用者)

▲ 題自画

厓臨碧水老松愚
厓は碧水に臨みて老松愚に、
路過危橋仄径迂
路は危橋を過ぎて仄徑迂なり、
佇立筇頭雲起處
佇立して筇頭に雲起くる処
半空遙見古浮圖
半空 遙かに見る古浮圖

▲ 題自画 十一月

碧落孤雲盡
碧落 孤雲尽き
虛明鳥道通
虛明 鳥道通ず
遲遲驢背客
遲遅たる驢背の客
獨入石門中
獨り石門の中に入る

これら「愚」、「迂」、「遅」の世界に最も近い存在として『こゝろ』においては「金魚売」(上、十四)、「植木屋」(上、二十六)の「御上さん」(二十九)そして「私」の両親を登場させている。一方、彼らとは全く異なり、ネガティブなかたちではあるが、「先生」、「K」、「私」もそれぞれそうしたものをまぬがれない存在として描かれているのである。しかし、そうした世界の陽面であるべき前者、とりわけ「金魚売」や「植木屋」が『こゝろ』では点景以上に描かれていない。そのこととこれらの漢詩や書画の製作、(小宮豊隆の『夏目漱石』によれば、『こゝろ』執筆中、漱石は午前中は小説の執筆、午後は書画を乞われるままにかいていた)ということとの関係については稿を改めて論じたい。

(注2) (下)八で「先生」は「私」を八思想界の奥へ突き進んで行かうとするあなたと語っている。

(注3) 相原和邦(前掲書)は次のようにのべている。

八「事実」の世界と合体したこの「私」の知性は、先生にはついに得られなかった新しい知性として、先生の期待に応える可能性を持っている。しかし氏によれば、こうした「私」の「新しい知性」は『こゝろ』においてはあくまで「可能性」にとどまるとされている。

八Kと先生の間について成立しなかった血潮の交流が、作品の結末において、先生の死を代償として、「私」と先生との間に、はじめて、辛うじて成立している。八「自由と独立と己れとに充ちた現代」(引用者注―「明治の精神」を指す)を越えるものが先生から「私」をつなぐ糸の中に期待されていた。八(傍点引用者)とあるところからもそうした氏の見解がうかがえよう。しかし、わたしが本論でのべてきた「私」の新しい八知ということも、氏が想定しているような八論理というかたちをとっているわけではない。「私」の八語り八の現在において次のように「私」はじしんの八理知八の限界を正しく知っているというかたちで、それが頭在しているということなのである。

八私は人間を果敢ないものに観じた。人間の何うする事も出来ない持つて生れた輕薄を、果敢ないものに観じた。八(上、三十六)

八其卒業が父の心に何の位響くかも考へずにゐた私は全く愚いものであつた。八(中、一)

八私は其時此燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれてゐる事に気が付かなかつた。しばらくすれば、其灯も亦ふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えてゐるのだとは固より気が付かなかつた。八(中、五)

八私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかつた。八(中、十)

八憐れな私は親孝行の出来ない境遇にゐた。八(中、十一)

そして『こゝろ』(上)で「私」によつて語られる対象(図)としての「先生」は、(下)でみたように、(下)で「先生」が語る「過去」の「先生」の精神/身体を否定(超出)した存在となつているといえる。